

Title	日本經濟學の根本原理
Author(s)	石川, 興二
Citation	經濟論叢 (1939), 49(1): 219-233
Issue Date	1939-07-01
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/131262">http://dx.doi.org/10.14989/131262</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

經濟學叢論 每月一日發行  
昭和十四年七月一日發行  
大正十四年六月二十一日第三號郵政特准掛號

# 京都帝國大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷 第一號

昭和十四年七月

(禁轉載)

## 京都帝國大學經濟學部創立二十年記念論集

田島・戸田・神戸・小川・河上・河田・山本・作田の前八教授肖像

記念展覽會及講演會寫眞

國家の社會的構成

完全豫見の問題

時局下に於ける農業計畫生産

世界經濟の動向

小工業の特質と其の助成方針

ナチスの經營共同體の理論及び構造に就て

徳川時代の經濟統制

信用理論と其の經濟的基礎

企業聯繫としての再保險

マックス・ウェーバーの國民主義

ロバートソンの物價變動理論

中小工業と市場

沒價值性理論の成立

政策學としての日本經濟學

日本經濟學の根本原理

經濟學部二十年を回顧して

經濟學部創立二十年記念經濟學會大會記事

彙報

外國雜誌論題

法學博士	河田嗣郎
文學博士	高田保馬
經濟學博士	八木芳之助
經濟學博士	柴田敬
經濟學士	大塚一朗
經濟學士	中川與之助
經濟學士	堀江保藏
經濟學士	中谷實
經濟學士	佐波宣平
經濟學士	白杉庄一郎
經濟學士	青山秀夫
經濟學士	田杉競
經濟學士	出口勇藏
經濟學博士	谷口吉彦
經濟學博士	石川興二
經濟學博士	本庄榮治郎

# 日本經濟學の根本原理

石川 興 二

## 序

大正八年五月廿九日に創立した我經濟學部は今や二十周年を迎へることになった。茲にこれを記念する所以のものは、過去を顧み以て新な發展に備へんが爲めである。

大學なるものは國家生活に於ける自覺的な頭腦である。廣く「世界に智識を求め」ることを國是として出發した明治維新の新日本は、大學を建て西歐の學問を取り入れることに努めた。かくして取り入れ來つた經濟學は、云ふまでもなく、資本主義制度を成立發展せしむるに役立つところの個人主義經濟學であつた。英國を母國とするこの個人主義經濟學は、世界に英國を首領とする白人の有色人種に對する搾取的秩序を成立せしめたと共にまた各國内に同様の對立的秩序を齎らした。世界大戰はこの白人の搾取的諸國民間の爭より起り、資本主義制度に對する社會主義的革命を以て終をつげたのであるが、我學部の創立されたのはこの一九一八年の前年である。この頃より我國に於ても資本主義的秩序に對する批判は次第に加はり批判の學として高まり來つたものは、社會主義經濟學であつた。然るに大正六年の滿洲事變はこの資本主義批判の立場を、社會主義より全體主義へと轉換せしめることゝなつた。

かくて我學部は我國に於ける資本主義制度批判期を通じて發展し來り、常にその先頭に立つて我學界を指導した。即ちその前期に於ては河上肇先生により、後期に於ては作田莊一先生によりこれを指導したのである。

扱て我國が廣く「世界に智識を求め」たのは、本來「皇基を振起」せんが爲めであつた。個人主義社會を以てその國體とする英國を母國として生れたところの個人主義經濟學がこれまで世界に於てまた國內に於て強者階級の利己主義的秩序を打立てたことは當然である。この搾取的秩序を打破して眞に人類を解放し以て總ての人々をして人間たらしめるところの共同體的新秩序を確立することこそが、正に「天皇を中心とする國民共同體」をその國體とせる日本を母國として新に生れ出すべき經濟學の使命でなければならぬ。而してこの爲めにはこれまで取り入れられたる個人主義經濟學、社會主義經濟學、全體主義經濟學等を止揚し以て日本經濟學を確立しなければならぬのである。

この眞日本經濟學の建設に對しても、我學部は既に早くその基礎を置いたのである。これまでの輸入經濟學に對し日本を母國とする日本經濟學成立の基礎をはじめて學問的に明かならしめたところのものは戸田海市先生であつた。この先生の意圖は、『祖國を顧みて』時代の河上肇先生の意圖となりまた作田莊一先生の究極的な學問的意圖とし持ちつゞけられたところのものである。同時に田島錦治先生により本庄教授の終始一貫せる日本經濟史の研究によりまた其他の人々により日本經濟學に對する幾多の貢獻が我學部より爲されたのである。

かくて今日日本の經濟學界が求めはじめたところのものは、正に我學部が最も早くより自覺し、その傳統として持ちつゞけ來れるところのものである。茲に我學部が自らの歴史を省りみる所以はこの傳統精神を明にし以て

現代日本の眞の要求に答へんが爲めである。即ちかくて生れ出づべき日本經濟學こそ、英國を母國とする個人主義經濟學が英國をして日没するところなき大英國たらしむるに役立てるが如く、日本が新時代の世界史的指導國民として自らを共同體的に具體化するのみならず、更に東亞共同體を確立し進んで世界共同體を建設すべきところのその使命の實行に眞に役立つところのものである。今や我學部は一致共同この重任に向ふて努力しつゝあるのである。

以上は、記念講演會に於て學部長として述べた挨拶であるが、これを茲にこの論文の序として記念することゝした。

## 一

今日は世界史の變革期である。封建時代より現代の資本主義時代への變革期に於て見られたが如く、變革期は國民的存在の興亡を決すべき危機である。こゝに於ては眞に自覺的なもののみが自己を高め得然らざるものは落ちて行くのである。

資本主義時代を通して複雑に聯關するに至れる世界史の現代變革期に於て日本がその國民的生命の眞の發展を計ると云ふことは嘗ての如何なる時代に於けるよりも難事である。それは單なる思ひ付によつてなさるべきものではなく、最も確實なる智識に基いてのみなし得るものである。これが爲めには先づ日本の生命の發展の原理を明にしこれに基いて日本が現代の變革期に處すべき指導原理を明にしなければならぬのである。これが即ち今日打立てらるべき日本學である。かくてこの日本學の根本原理となるものは、日、本、的、生、命、の、發、展、の、原、理、である。この日本の發展の原理は、これを他國のそれと比較研究することによつてのみはじめて明確にし得るところのもの

のである。

「人類歴史は階級闘争の歴史なり」と云はれることは、西歐諸國民についてはこれを承認せざるを得ないのである。これ西歐に於ては早くより支配者階級と被支配者階級との分裂對立が徹底して居たが故である。

かくの如く西歐諸國民の生の構造の特色は、そこに於て支配者階級と被支配者階級とが分裂對立してゐることであり、この相對立せる階級の力の外にはこの對立に處すべき力はなかつたのである。かくて人類歴史は階級闘争の歴史とならざるを得なかつたのである。

この西歐的實在の分裂對立の構造はそこに於て成立せる社會思想の構造を見ることによつて更に明にされる。即ちそこに於ては支配者階級の立場に立てる思想と被支配者階級の立場に立てる思想とが嚴しき對立を示して居る。先づ前者の立場に立てるものはマキアベリーの君主論並にこの系統を引けるヘーゲルの國家論の思想である。ヘーゲルに於ては、最も具體的な人間的實在は Staat 「國家」であつて、この國家に於ける最高の原理は *firstliche Gewalt* 「王侯の權力」でありこの王侯の權力より出でたる法に従ふことが「人間の自由」であることとなる。「王侯の權力」の擔當者たる「英雄」又は「世界史的人間」は神の意志を直接に受けてゐるものであつてこれのみが時代を洞察することが出來、民衆はこれに従ふて行くのである。

かく權力的支配者を以て國家生活の最高なる原理と考へる支配者階級的立場の思想に對して被支配者階級の思想が成立つ。即ちヘーゲルを「逆立ち」せしめたところのマルクスの思想はその代表的なものである。彼にとつては、國家なるものは少數の支配者が多數の被支配者を支配し搾取するところの權力的道具たるに過ぎない、故に

人間の眞の自由の爲めには支配者階級を止揚して階級なき從つて國家なき社會に至らなければならない、この爲めには被支配者の階級的團結により篡奪者たる支配者階級を篡奪するところの階級革命によらなければならないと考へたのである。この階級革命の立場はこれを徹底すれば、各々の國家の範圍を越へて「萬國の勞働者よ團結せよ」と云ふこととなるのである。

かくの如く、西歐的實在の根本的構造は、そこに於て支配者と被支配者との階級的對立が徹底してゐるところの階級社會的構造である。然らば我國に於てはかくの如き構造が全く見られないかと云ふに、そうではない。我國に於ても各時代に於て支配者階級と被支配者階級との別が見られる。古代に於ては民族的原理に基いて中世に於ては武力的原理に基いて而して今日に於ては財産的原理に基いてそれが見られる。而してそこには支配者階級たらんとするもの相互の間に於てまた、支配者階級と被支配者階級との間に於て、諸種の對立が見られる。この點に於ては、西歐の階級社會的構造が我國に於ても見られ得るのである。この點を高調することによつてマルクスの理論をそのまゝ我國に適用せんとするものが所謂マルキストである。

而も我國民史の發展を西歐のそれに比較する時こゝに根本的な相違のあることが明となる。それはこの社會的對立の底にこの社會的對立を越へた第三の原理のあることである。それは即ち「天皇を中心とせる國民共同體」であつて、これが我國民的實在の根本的特徴をなすものである。故に我國民史の各時代について見られる社會的對立なるものは、西歐的實在に於けるが如き最終的な原理ではないのであつて、この社會的對立の底には常に共同體的基础が存するのである。社會的對立はこの共同體に於てあるところの第二次的なものであり、我國民史を貫

いて變らざるところの恒久不變なる構造は、この「天皇を中心とせる國民共同體」である。故にこの共同體が我國の本體であり即ち國體である。

次にこの國體たる共同體を明にせんが爲めには、この共同體をそれに於てある市民社會的なものより遊離して、その構造を本質的に見ることを要する。先づこの共同體の最も本質的なものは「天皇の全體性」である。即ち天皇はこの國民的存在の中心として國民と一體をなしその全體を擔ふて居られるのである。而も此天皇は萬世一系であつて國民史を一貫して常に國民と一體を爲して居られる。故に常に今上天皇として國民史の全體を擔ふて居られるのである。天皇の全體性はかくて歴史的全體性である。かくの如き歴史的全體性として天皇は國民史の全體を通して國民と一體的な關係にあらせられるが故に、明治天皇が『維新の詔』に仰せられたが如く、常に「億兆の父母」と「赤子」との關係にあるのである。

總て共同體なるものゝ本質は、市民社會に於けると全く異なり、そこに於ては全體が個々人を重んじ個々人が自己の性能を全體の爲めに發揮するところのものである。然るに我國國民共同體に於ては、その歴史的全體性が天皇に於て人格化されて居り従つてこの全體と國民個々との間には直觀的な人格的關係が成立ち従つてそれは最も強い愛の關係となるのである。これが我國國民共同體の根本的な特徴であつて、その最も鞏固なる團結性は、全くこれに基づくのである。これと異なり全體が人格化されて居ない共同體に於ては、それ程強き愛の結びは成立し得ない。唯だ家族共同體に於ては、全體は親に於て人格化されて居りこの親と子との間に鞏固な愛の結びが成立つ。我國體の特徴はこの人格的全體性が國民史に於て成立し一貫してゐることである。



かくて此 天皇より國民に對して「天下億兆一人も其處を得ざる時は皆朕が罪なれば」なる御言葉が自ら現れ來るのである。それは親の生命の中に子が生きて居るが如く、國民は「赤子」として 天皇の御生命の中に生きて居るからである。これが全體を眞に擔ふて居られる 天皇の御心であり親の子に對する絶對愛である。この全體性である 天皇に對して國民は恰も子が親の心を心として生きるが如く、天皇の全體性をその心として生きるのである。それは恰も一天の月が田毎に映つて居るが如く個々の民は 天皇の全體性を自己の心に體して居るのである。換言せば個々の人民は自己を 天皇に没して居るのである。これ即ち「克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ」である。天皇の全體性を體して居る個々の民は當然に億兆心を一にすることゝなるのである。こゝに「天皇を中心とする國民共同體」がある。而もこの 天皇の全體性は國民の總てをしてその處を得しめんとする大御心である。民はこの御心を體しこれを實現すべく各々の在る地位に於てその分を盡すのである。かくして一が多を生かし多が一を生かすと云ひ得るのである。また全が個を生かし個が全を生かすのである。こゝに於て全と個とが、天皇と人民とが一體となつて居るのである。即ち 天皇より民への仁と民より 天皇への忠とによつて一體に結ばれて居るのである。

これは市民社會と全く異なる構造である。市民社會に於ては、支配者階級と被支配者階級とが相對立し、互に己れの爲めに他に對する。即ち支配者は自己の目的の爲めに被支配者階級を手段として利用するのであり、被支配者階級は自己の利益の爲めにこの被支配者階級に反抗しこれを否定せんとするのである。かくて市民社會は對立抗爭を以てその原理となし、共同體は共同愛を以てその原理とすると云ふことが出来るのである。

かくて西歐的實在は、云はゞ社會なる一次元の構造であり従つてこの社會に於ける支配者階級と被支配者階級との對立によつてその歴史が進展して行つたに對して、我國民的實在は云はゞ二次元の構造を有するものであつて、社會の基底に更に共同體がある。従つて我國の歴史はかくの如き二次元の構造として進展して行つたのである。

その社會面のみについて見れば、新な時代の成立期に於ては、その時代の新たな原理の擔當者たるべきものが互に相ひ争ひ、かくて新時代の原理の擔當者の地位が定まり、その支配が確立するならば、時代は安定期に入ることとなる。然るにその末期に於ては、この支配者に對する被支配者の反抗が次第に高まつて來ることとなる。古代に於ては氏族團體相互の對立鬭争が天皇氏の原理によつて統一せられこゝに大化の改新が成つた。其後次第に莊園が發展するにつれて、支配者階級の被支配者階級に對する壓迫が次第に加はつて行つた。中世に於ては新たな支配的原理たる武力の擔當者が相互に鬭争した戰國時代の次にこれが信長、秀吉によつて統一せられ、家康に至つてこの新な時代の原理による支配の秩序が確立した。然し徳川期の末期に至つては資本主義的な原理が次第に高まり來りこれと共に被支配者階級の支配者階級に對する抗爭が高まつて來た。同様に近世の資本主義時代に於てもその成立期に於ては新な時代の原理の擔當者たる資本家が互に相争ふたのであるが、やがて大資本家による支配的秩序が確立して安定期に入つた。然るに今やこの時代の末期となつて被支配者階級の支配者階級に對する抗爭が次第に激化しつゝあるのである。

かくて我國史を通觀するに社會面に於ては、我國に於ても階級の對立鬭争が見られるのである。我國の歴史が

これのみにて進展したとするならば、それは西歐的なものと異ならなかつたのである。然るに我國に於ては、この社會面に於ける鬭争の基底に「天皇を中心とする國民共同體」があつてその力が更に働いて居るのである。即ち社會面に於ける對立が激化し來つて、國民的存在が危險にさらされるに至るならば、この社會的對立のみによつて事が決定せられずして、社會的對立を越へた第三の原理としての「天皇を中心とする國民共同體」の力が高まり來り、その社會的對立を止揚してしまふのである。例へば古代社會に於て氏族團體の相互の對立が激化し來れる時には、これを止揚せんとする 天皇を中心とする國民共同體精神が、先づ聖德太子の憲法十七條に現れた。

一曰。以<sub>レ</sub>和爲<sub>レ</sub>貴。無<sub>レ</sub>許爲<sub>レ</sub>宗。人皆有<sub>レ</sub>黨。亦少<sub>ニ</sub>達者<sub>一</sub>。是以或不<sub>レ</sub>順<sub>ニ</sub>君父<sub>一</sub>。乍違<sub>ニ</sub>千隣里<sub>一</sub>。然上和下睦。諸<sub>ニ</sub>於論<sub>一</sub>事。則事理自通。何事不成。……十二曰。國司國造。勿<sub>レ</sub>斂<sub>ニ</sub>百姓<sub>一</sub>。國非<sub>ニ</sub>二君<sub>一</sub>。民無<sub>ニ</sub>兩主<sub>一</sub>。卒土兆民。以<sub>レ</sub>王爲<sub>レ</sub>主。所<sub>レ</sub>任官司。皆是王臣。何敢與<sub>レ</sub>公。賦<sub>ニ</sub>斂百姓<sub>一</sub>。……十五曰。背<sub>レ</sub>私向<sub>レ</sub>公。是臣之道矣。凡人有<sub>レ</sub>私必有<sub>レ</sub>恨。有<sub>レ</sub>恨必非<sub>レ</sub>同。非<sub>レ</sub>同以<sub>レ</sub>私妨<sub>レ</sub>公。憾起則違<sub>レ</sub>制害<sub>レ</sub>法。故初章云。上下和諧。其亦是情歟。……十七曰。夫事不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>獨斷<sub>一</sub>。必與<sub>レ</sub>衆宜<sub>レ</sub>論。少事是輕。不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>必衆<sub>一</sub>。唯速論<sub>ニ</sub>大事<sub>一</sub>。若疑<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>失。故與<sub>レ</sub>衆相辨。辭則得<sub>レ</sub>理。

こゝに二つの原理が對立的に見られてゐる。私に對する公であり、黨に對する和である。私を計るものは黨するのであり、公を重んずるものは和するのである。前者は社會に於ける對立の原理であり後者は共同體に於ける共同の原理である。かくてそこには、既に社會の對立の原理に對して共同體の原理が明にされてゐるのであるが、この憲法十七條の意圖するところは、前者の原理を否定し後者の原理を我國の指導原理となさんとするにあった。

この共同體的革新の精神は、大化の改新に於て愈々實現せられた。相對立抗爭せし氏族團體は「天皇を中心と

する國民共同體」の原理によつて止揚せられ諸の民族的團體に屬して居た土地人民が王土王民となり、この土地の用が班田收授の法によつて總ての民に對しその生活の必要に應じて與へられたのである。こゝに「天皇を中心とする國民共同體」が具現せられたのである。この國民共同體の構造はやがて古事記並に日本書記に於て、日本の國土並に人民の一切が同一祖神より生れ出でたるものとして而して 天皇はこの祖神の直系として思想的に基礎付けられたのである。これは日本の全構造を氏族共同體的に把握した史觀であつて、このことは其後の日本國民史の展開に對し決定的な意義を有するものである。

かくて一度成立し思想的にも確立されたところのこの「天皇を中心とする國民共同體」は、社會面に於ける對立鬭争によつて破壊されることなく、反對に社會面に於ける對立鬭争を止揚することによつて我國國民史を今日まで押し進めて來る根本的な原動力となつたのである。これが眞の意味に於ける我國の傳統なるものである。即ちこの古代の末期に於て不輸不入の權を有する莊園なるものゝ發展が國民の生活を壓迫することに對しても 天皇は共同體的立場に立つてその原因たる社會の有力者の土地兼併を壓へんとせられた。詔曰。山川藪澤之利。公私共レ之。具有ニ令文。如聞。比來。或王臣家。及諸司寺家。包ニ并山林。獨專ニ其利。是而不レ禁。百姓何濟。宜下加ニ禁斷。公私共レ之。如有ニ違犯者。科ニ違勅罪。所司阿縱。亦與同罪。

天皇はかく共同體的立場に立つて社會面に於て行はれて居る土地兼併の弊を壓へんとされたのであるが遂にこれを防ぐことを得ず莊園は愈々發展して行つた。こゝに次の時代への契機が準備されたのである。

不輸不入を原理とする莊園は國中に國を成すものであるが故にその發達は國民的實在を無秩序混亂に陥らしめ

ることゝなつた。この無秩序状態より國民を救ふが爲めには武力の原理による新秩序を必要とした。この新秩序の確立も我國に於ては天皇より賴朝に守護地頭の補任權を勅許されることによつてなされたのである。

かくて我國に於ては封建社會も「天皇中心の國民共同體」の基礎の上に成立つたものでありこれを否定するものではなかつたのであるが、この封建社會より資本主義社會への變革も「天皇を中心とする國民共同體」の立場に於てなされたのである。こゝに西歐的な展開と全く異なる構造が見られる。この變革は例へば佛蘭西に於ては封建的首領として我國の將軍に相當するところのルイ王朝に對する第三階級の階級革命によつて、このルイ王朝を否定することによつてなされた。然るに我國に於てはこの封建的社會はこの社會的對立面を越へた第三の原理としての國民共同體の力によつて止揚されたのである。即ちこの國民共同體の中心としての天皇の全體的精神の發露とこの共同體の成員として大御心を體して身命を賭して活動した多くの志士との一體の働きによつてこの變革は最も犠牲少くなされたのである。『維新の詔』に於ける「今般朝政一新の時に膺り天下億兆一人も其處を得ざる時は皆朕が罰なれば」と仰せられたのは天皇の全體精神の最も端的なる表現である。これを體し行動した志士は、それがこれまで居たところの社會的階級の立場を脱し國民共同體の立場に立ちその忠なる成員として行動したのである。佛蘭西が幕府に英國が朝廷に申し出でたる援助を受け入れなかつたことも、また海舟と南洲とが平和裡に大事を定めることも、こゝに於て可能となつたのである。

かくの如く我國の變革の構造は、常に共同體の立場より社會的對立を止揚することによつて爲されたのであつて、その特色はこれをルイ王朝が外國の援兵を自國內に攻め入らしめんとなし、これに憤激せし國民が國王を死

刑に處した佛蘭西革命の構造並に同じく皇帝を死刑に處したロシヤ革命の構造更に皇帝を追放せし獨逸革命の構造に對比せしむる時、極めて明となるのである。今日國王を戴いて居る英國民も皇帝を死刑に處することによつてその革命を遂行したのである。

かくて西洋に於ける皇帝なるものは King, Roi, Kaiser, Czar. 等種々なる名によつて呼ばれるが總て社會面に於ける權力的支配者階級としての存在である。従つて社會的對立によつて否定されたのである。然るに、我國の天皇なるものは、これと全くその性質を異にするものであつて、社會的對立面を越へたところの共同體の中心である。従つて共同體的立場に立つて社會的對立自體を止揚されるのである。

この 天皇の本質を自覺せざるが爲めに我天皇と他國の皇帝とを混同し、この爲めに思想的に多くの誤謬がなされて來たのである。例へば共產主義革命がロシヤに於てなされその結果ロシヤの皇室が否定されたことを直ちに治安維持法防共協定等の必要理由となさんとするが如き思想はこれである。

抑も財産的原理は社會面に於ける原理である。故に社會面に於てその存立を有する西洋の皇帝は權力者即有產者として財産をその存立の原理として居る。故にこの財産の原理の動搖は、皇帝自體を否定することとなる。然るに社會的對立面を越へて居らるゝ 天皇にとつては財産的原理の變動は何等その影響を及ぼし得ないのである。このことは我國史上の事實であつて、大化の改新に於ても見られる。また明治維新に於ても國土奉還が容易になされたのである。

本來我國體がかゝる外來思想によつて動搖させられるものでないことは我國民史の事實がこれを明にして居

る。即ち佛法を王法の上に置く佛教思想も、易姓革命思想の上に立つ儒教も、またルッソー民論もこれを自由に取り入れ國體の立場に於て止揚して我國民史は今日までその發展を完ふしたものである。これ實に我國體の特有の構造によつて可のみ能となるものである。

## 二

かくの如き對立的構造を有せる西歐に於て成立せる經濟學は、この生の表現とし、當然に支配者階級の經濟學と被支配者階級の經濟學とに分たれ得る。近世の經濟學の出發點を爲せる重商主義經濟學は支配者階級の經濟學である。これに對立して起つた重農主義經濟學並に個人主義經濟學は被支配者階級の經濟學であると云ふことが出来る。經濟學がはじめて實踐科學として具體的に確立したのはこの個人主義經濟學に於てであるが、この個人主義なるものは、支配者階級の權力主義に對する反抗思想として個人の經濟的自由を主調したところのものである。即ち經濟を支配者階級の權力的支配の對象たらしめることを止め個人の利己心による自由なる活動に委ねることが全體の利益を催進する所以であると主張したのである。社會主義なるものはこの被支配者階級の立場を更に押し進め被支配者の階級的團結を以て支配者階級自體を否定せんとするものである。この社會主義經濟學の興隆に對抗して起り來れる今日の全體主義經濟學なるものは、再び支配者階級の經濟學である。即ちヒットラー、ムッソリーニと云ふが如き國家權力の把握者を首領としこれに生死を誓へるナチス黨員又はフンシスト黨員の如き團結を以て所謂一黨專制を行ふところのものである。この支配者階級の構造は將軍を首領としこれに生死を誓へる封建武士團が中世社會に於て支配者階級として權力を把握したと同様な構造を有するのである。

かくの如く西歐の經濟學は、總て社會的對立面に於て成立せるものであり、從つて階級的對立を前提となし而

して何れかの階級の立場に立てるものである。即ち支配者階級の經濟學は己が階級に對する被支配者階級の存在を前提として自己の經濟的目的を國家權力によつて被支配者階級に對し徹底せんとするものである。これに對立するところの被支配者階級の經濟學は、支配者の壓迫より脱れて自己の經濟的目的を自由に實現せんとするところのものである。かくの如き階級對立の原理に立てる西歐經濟學は、その當然の結果として、そこに搾取者と被搾取者階級とが對立するところの資本主義的秩序を國內にまた世界に打立てたのである。現代の最大の苦惱は、こゝにある。資本主義制度の齎らせる巨大な生産力もこの秩序の下に於ては戰爭の激化を準備するに役立つものとなり、大多數の人々は困窮狀態に置かれて居る。この現狀を打破し得るところのものは、即ち階級對立を、共同的に止揚することを以てその國民的、生命の發展原理とするところの日本の經濟學の使命でなければならぬ。

この日本經濟學の現代變革期に於ける第一の課題は、先づ日本國內の資本主義的階級對立を止揚し「天皇中心の國民共同體」の本質を國內に徹底的に實現する爲めに日本國民經濟を研究することである。既に明にせし如く、日本的な生の根本構造は社會的なものが「天皇を中心とする國民共同體」に於てあることである。故にこの根本構造に即して日本國民經濟を研究しなければならない。而して社會的なものはこの共同體を基礎としてそれに於てある第二次的なるものであるが故に、この共同體的なものを基礎としこれとの關係に於て社會的なものが考察されなければならないのである。かくて日本經濟學に於ては、先づ我國民經濟が共同體と社會との關係に於て如何に進展し來れるやを歴史的に明にしなければならない。更に我國民經濟の現在の構造と現在に至れる發展的構造とが共同體と社會との關係に於て理論的に究明されなければならない。更に此等の事實的研究を基礎として我國民經濟に於ける社會的對立が共同體的立場より如何に止揚さるべきかが實踐的に攻究されなければならない。かくて西歐的經濟學が社會面に止るところの一次元の經濟學であると云ひ得るに對し日本の經濟學は二



次元の經濟學であると云ふことが出来るのである。而してこの共同體の立場に立てる二次元の經濟學に於ては、社會の對立面に於て成立てる一次元の經濟學がその社會面に關する限り取入れられ役立つこととなるのである。

この日本經濟學はより大なる範圍に於て打立てたる階級對立社會をその對象とする。それは白人の重商主義によつてはじめられ帝國主義によつて發展せしめられたところのものであり白人を支配者階級となし有色人種を被支配階級とするところの亞細亞に於け階級對立の社會である。これを共同體的に止揚することが、日本經濟學の第二の課題である。これが爲めにはかゝる狀態に至るべき東亞の經濟的發展を先づ歴史的に明にし、更にかゝる狀態並にかゝる狀態に至るべき東亞經濟の構造を理論的に明にし、然る後に此等の事實的研究に基いてこの階級的對立を止揚して東亞共同體を建設する爲めの實踐的指導原理並に諸政策を明にしなければならない。これ即ち日本經濟學としての東亞經濟學である。この東亞共同體の建設は、天皇が日本國民共同體の中心であらせられるが如くに日本國民がその中心となり、その共同體の原理を周圍に擴充し行くことによつて即ち一方白人の支配を却け他方壓迫されて居る有色民族を高めることによつてなされるのである。

この東亞共同體を土臺として日本經濟學が究極に於て打立てんとするところの世界秩序は世界の總ての國民が各々その處を得て個性を存分に發揮し得るところの世界共同體である。この爲めの世界經濟の歴史的・理論的研究・實踐的研究は日本經濟學の第三の課題である。これ日本經濟學としての世界經濟學である。

かくして日本經濟學が、國民共同體を、東亞共同體を更に進んで世界共同體を建設することを以てその任務とするは、天下億兆一人も其處を得ざるものならしめんとする 天皇精神を世界史的に擴充するのであるつて、これ廣く「智識を世界に求め皇基振を振起する」所以である。